畳の光目

～和を体験できる灯り～

茶道のために使われていたものが、照明がへと変化する。名付ける手法「畳目」を活かした新たな照明をデザインする。茶道で使われる畳空間は、茶人による和の極地と言えるだろう。その空間で用いられる精錬された畳の手法に注目する。単に畳は水平方向に留まるデザインではないだろう。畳を壁のように垂直に配置し、名付ける手法「畳目」を設ける。「畳目」として、置炉のような炉の形をした照明を置く。よって、本来は水平にデザインされる「畳目」であるが、垂直に置き新たな表現方法とてして確立する。また、置炉を照明とするデザインは、新たな和の表現になるのではないか。

本デザインは茶道という伝統を連想し、来訪者が体験できる照明である。暗闇の中を優しく照す照明であり、和の照明として汎用的に活用できる。畳や「畳目」の配置は自由であり、その場に応じた和の照明としてデザインできる。京の暗がりを照す新たな和の照明となるだろう。